

—関係部署—

役 職	スタッフ名
センター長 兼糖尿病・内分泌代謝内科部長 兼リハビリテーションセンター副センター長	檜根 晋
糖尿病・内分泌代謝内科医長	大槻 朋子
糖尿病・内分泌代謝内科医長	倉敷 有紀子
糖尿病・内分泌代謝内科副医長	伊藤 博崇
糖尿病・内分泌代謝内科医員	高山 瞳
糖尿病・内分泌代謝内科医員	酒井 保奈

—概要—

糖尿病治療の目標は血糖値を良好にコントロールすることにより、合併症の発症、増悪を予防し、健康な人と変わらない寿命を確保することである。そのためには、長期間、患者の生活全般にわたって介入することが必要になる。糖尿病センターは多職種による糖尿病チーム医療を促進するために設けられた。2020年7月より糖尿病センター運営会議を隔月にて開催し、糖尿病センターの方針決定を行っている。

具体的な役割を以下に挙げる。

- 外来での療養に関する患者サポート(フットケア外来、糖尿病透析予防指導)
- 糖尿病教育入院中の患者指導(糖尿病教室、DVD教室)
- 市民啓発活動(生活習慣病予防教室、世界糖尿病デーりんくう健康フェスタなど)
- 血糖自己測定装置の精度管理、患者指導、運用
- 糖尿病療養指導に関わる人材の育成

—実績—

● 糖尿病外来における改善と効率化

① 大血管合併症の評価の促進

外来通院中の糖尿病患者における大血管合併症が不十分であった。このため、頸動脈エコー、ABI、負荷心電図を年に1回評価することを目標として各医師に働きかけ、検査を積極的に行った。検査で異常を認めた場合、各診療科にコンサルトを行った。

② 糖尿病合併症の見える化

糖尿病患者の糖尿病の合併症の程度、合併症評価のための検査、栄養指導、糖尿病透析予防指導などの受診歴などの情報が各医師にてまちまちであり、一元的に管理できていない状態であった。このため外来サマリーとして、定型フォームを作成し、一元化、合併症の見える化を行った。

● 入院患者の増加についての対策

入院患者数の増加を目的として主に専門医を対象とし

て、地域のクリニックを訪問し、入院患者の獲得に努めた。

● 外来診療時間短縮の試み

在宅物品の管理のタスクシフトと一元化

インスリンなど自己注射を行っている患者において、従来処方せんでの運用が行われていたが、在宅物品の過不足の調整を行うために外来にて多大な時間を要していた。院外処方せん窓口にて一元化して調整してもらうこととなり、患者の診療時間の短縮を行うことができた。

● 院内および院外啓発活動

7月30日『個性響きあう糖尿病チームを目指して』と題して多職種カンファレンスにて各職種での活動の報告ならびにシンポジウムを行った。

毎年世界糖尿病デーりんくう健康フェスタとして、市民啓発イベントを行っていたが、本年は新型コロナウイルス感染症の流行により、施行は困難と考えられた。そのため、本年は外来ブロックにポスター『糖尿病と災害』および自宅でもできる運動に関する動画展示を行った。

● 血糖自己測定器の管理、運用に関して

昨年に引き続き、病棟にて運用している血糖測定器の定期的な精度管理を臨床検査技師にて施行した。また自己血糖測定の指導に関して、従来は看護師より行っていたが、技師での指導管理を8階山側病棟から開始した。

—今年度の成果と反省点—

糖尿病センター運営会議での方針決定を軸として、実績を上げることができた。本年度は主に、従来の診療における非効率な部分の改善を中心として行った。診療科の顔としての院内ホームページの刷新、患者のニーズに合わせた糖尿病教育入院のパラエティを増していくことが、今後必要なことと考えられる。

—来年度への抱負—

糖尿病で未治療の患者、あるいは糖尿病治療中でコントロール不良の患者は多数いると考えられるため、引き続き糖尿病教育入院の増加をはかってきたい。